

令和 5 年 5 月 11 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K01054

研究課題名(和文)古代ギリシアにおける「民主政の技法」とその伝播に関する政治文化史的研究

研究課題名(英文)The arts of democracy in classical and Hellenistic Greece

研究代表者

橋場 弦 (Hashiba, Yuzuru)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：10212135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、古代ギリシアにおいて、多数の市民の政治参加を可能にしたさまざまな政治文化、すなわち抽選システム、政治参加への日当制度、碑文による情報公開、公文書管理などを、総じて「民主政の技法(Ars Democratica)」と定義し、その成立とギリシア世界への伝播の過程を解明しようと試みた。結論としては、(1)民主政の技法は、他国に先駆けて民主政を達成したアテナイでまず確立した。(2)その背景には、他国に比べて飛び抜けて多い人口をアテナイが抱えていたことがあった。(3)その技法は、アテナイがペロポネソス戦争に敗北した後、前4世紀になってギリシア世界に広がった、ということが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

代議制民主主義が機能不全に陥り、国民投票など直接民主主義的手法がポピュリズムの危険性をはらむ一方で、世界のあちこちで強権主義・権威主義が急速に台頭しつつある現代において、暴力やテロといった破壊的手段によらずに民主主義を持続可能なものとするにはどうしたらよいか、という現代的な問題に対する手がかりを、民主政の生命である市民参加のメカニズムを歴史的に解きあかすことによって、与えることができる。これが本研究の今日的な意義である。

研究成果の概要(英文)：The concept of *ars democratica*, or the arts of democracy, is defined here as any methods or techniques, both physical and institutional, that were used to facilitate the effective management of democratic governments in classical and early Hellenistic periods (5-3 centuries BCE), and include allotment systems, pay for attending assemblies and jury courts, and access to public information through epigraphical media as well as public archives. This study has brought it to light (1) that the arts of democracy were first established in the middle-fifth-century Athens, which had reached democracy in the end of the sixth century, (2) because it had much more population than most of the other poleis in Greece and therefore needed to control large scale of groups at one time such as the assembly, council, and popular courts, and (3) that the arts of democracy were diffused only after Athens was defeated by the Spartans in the Peloponnesian Wars (431-404 BCE).

研究分野：古代ギリシア史

キーワード：民主政 民主主義 ギリシア 古代 抽選 技術

## 1. 研究開始当初の背景

21世紀に入ってから急速に進むグローバル化は、社会経済的格差を世界的に拡大したが、19世紀以来の近代的代議制民主主義は、この問題に対処する方策を見いださずあぐねている。政治エリートはしばしば国民投票という直接民主主義的手法に解決を見いだそうとするが、その結果は、イギリスのEU離脱に見られるように、現代政治の方向性をいよいよ不透明なものにするばかりである。こうした政治状況は、民主主義の意思形成システムを維持しながら、いかにして一般国民の政治参加を実効的・安定的な方向に導くことができるかというアクチュアルな問題関心を、歴史学の分野でも提起してきた。本研究の背景には、政治への市民参加という問題への関心の高まりがある。

前5世紀のアテナイにおいて典型的に開花した古代ギリシア民主政は、全市民が「順繰りに支配し支配される」(アリストテレス『政治学』第6巻2章)という原則を、普遍的に共有していた。女性・奴隷・在留外人は政治から排除されていたものの、両親ともにアテナイ人であれば家柄・財産・能力を問わず一人一票の参政権を与えられるアテナイ市民団内部では、政治参加の平等が徹底していた。国家の意思決定は、市民の全体集会である民会が多数決をもって下し、またそれを執行する役人同僚団はおおむね抽選で選任され、また司法でも、やはり抽選された一般市民からなる裁判員が無記名秘密投票によって判決を下した。このような直接参加型民主政が、建前のみならず現実においても機能しえたのは、いかなる要因によるのか。またその民主政という政治様式は、どのようにして古代ギリシア世界に拡散していったのか。

この問題について注目すべきは、古代ギリシア民主政に固有の政治文化——民会決議碑文、公文書館、民会・裁判員手当、法廷における計時システム、抽選手続きの機械化・合理化、徽章(token)を用いた人員管理など——が発達していたという事実である。物的な道具立てや発想を含むこうした政治技術が、じつは日常レベルで多数の市民たちの政治参加を支えていたのではないか。この発想が本研究の出発点である。本研究では、一度に大勢の市民に情報を提供し、かつ彼らを効率的に組織し政治参加させるこのような政治技術全般を、仮に「民主政の技法(Ars Democratica)」と呼ぶ。この「民主政の技法」が、具体的にどこから発生・発展し、それがどのようにギリシア世界に拡散していったのか、またそれがギリシア民主政自体の拡大発展とどのような関連にあるのか。これが本研究課題の核心となる問いである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、先述の「民主政の技法」の具体的諸相を明らかにし、その発達と拡散の軌跡を跡づけることによって、次の仮説を証明することにある。すなわち、けっして face to face の社会とは呼べないほどの大人口を抱えるアテナイでこそ、この「民主政の技法」が発達し、かつ普遍性をもった政治文化としてギリシア世界に広く伝播していった、という仮説である。あたかも前4世紀に、アテナイの言語であるアッティカ方言がギリシア世界に伝播し、やがてコイナー(共通言語)に成長したのと同じように、いわば政治的コイナーとしての「民主政の技法」が、アテナイを発信元として拡散していったという想定がその背景にある。このような背景から、本研究は具体的に以下の3つの問題を解明することを目標とする。

(1)「民主政の技法」とはどのような政治文化であったか：先行研究が個別に明らかにしてきたように、アテナイ民主政は市民参加の原則を実現するため、さまざまな政治技術や道具立てを開発した。それは民会出席者や裁判員への日当制度、テスモタイ(司法担当官)による裁判日程割り当て、投票方式などの制度や行動様式から、抽選器(kleroterion)・徽章(pinakion)・投票具(psephos)・碑文・公文書館といった物的な装置にまで及ぶ。こうした「民主政の技法」の具体的諸相を、考古学的遺物の調査や文献・碑文史料の分析をもとにまず明らかにする。

(2)「民主政の技法」はどのような条件下で発達したか：これらの政治的技術がアテナイで発達した背景には、どのような条件があったか。抽選・選挙・投票という行動様式は、他のギリシア・ポリス、他の政体(寡頭政など)にも存在したが、アテナイ民主政において他のポリスに見られない独自の発達を遂げた原因は何か、そしてそれは、アテナイが例外的に広い領土(2,550 km<sup>2</sup>)と大きな人口(全体20~30万人、成年男子市民2~5万人)を擁し、中心市はface-to-face societyとは呼べない都市型社会であったこととどのように関係するのか、という問題にアプローチする。

(3)「民主政の技法」はギリシア世界にどのようにして受容され、伝播したか：前4世紀は、アテナイの国際的威信が前世紀に比べて相対的に低下するにもかかわらず、民主政がギリシア世界の他の多くのポリスに拡大し、しかもそれらにはアテナイ型の政治文化が伝播していった。それはどのような理由からか。他のポリスは何故アテナイ型の民主政を受容し、発展させていったのか。政治的覇権によらず民主政が拡大していった現象を、権力による強

制ではなく、政治文化の受容と伝播の過程ととらえ、その背景を諸国の碑文史料をもとに説明する。

### 3. 研究の方法

以上の問題を解明するための方法として、基礎的史料（古典史料と碑文史料）の網羅的収集・分類を行った。とくに注目した史料は、古代ギリシア史研究には最も基本的な碑文史料である『ギリシア碑文集成（*Inscriptiones Graecae*）』、『ギリシア碑文補遺（*Supplementum Epigraphicum Graecum*）』などである。さらに近代になって刊行されたおびただしい点数の古代ギリシア法制度史・政治史・社会史関連の研究文献を入手し、問題点と議論の整理を行った。この作業を通して史料の解釈と新たな問題点の地平を切り開くことに努めた。

以上の方法により、各年度を通して研究代表者（橋場）は、「民主政の技法」（*Ars Democratica*）と呼ぶべき歴史的現象の諸相を、古典史料・碑文史料および考古学的史料をもとに明らかにすることに努めた。アテナイ民主政において、投票方式や大人数の組織形態などの実務面において考え出されたさまざまなツールのうち、研究第1年目は民衆裁判所で用いたものに焦点をあてたが、第2年目は文書による記録とその保管に注目し、書記技術（*literacy*）が民主政においてどのような役割を果たしたのかを中心に検討した。このテーマについては、すでに R. Thomas, *Oral Tradition and Written Record in Classical Athens*, Cambridge, Cambridge UP 1989; idem, *Literacy and Orality in Ancient Greece*, Cambridge, Cambridge UP 1992 以来、欧米でも幅広い研究の蓄積がある。そして最終年度においては、「民主政の技法」が古典期のアテナイのみならず、とくに前4世紀前半のギリシア世界に拡散していった経緯を、いくつかの事例研究を通して明らかにしてゆくことに努めた。

### 4. 研究成果

その結果、今回得られた結論は、以下の通りである。

（1）アテナイがデロス同盟諸国に民主政を強制したケースは、ほとんどなかった。シチリアのシラクサのように、民主政はアテナイの勢力圏外でさえ出現した。各地のポリスが民主政の採用を決意したのは、アテナイの軍事的・政治的強制力によるものではなく、各国みずからの意思であった。アルゴス、テバイ、シラクサなど、ギリシア民主政には多様な形態があり、アテナイ民主政に還元して考えることはできない。そのかぎりでは、「アテナイ中心史観」は誤っている。しかし、前四世紀に民主政が拡散してゆく様子を制度面から調べてゆくと、アテナイの影響は、ある意味でむしろ色濃くなってゆくことがわかる。つまりアテナイが覇権を手放したあとから、アテナイ風の制度が他国の民主政に浸透する傾向が強まるのである。

ペロポネソス戦争に敗れたアテナイは、かつての軍事力による支配圏を失い、民主政のイデオロギーを声高に喧伝することもなくなった。しかし、他国にさきがけて民主政をきずいたアテナイは、民主政を効率よく運営してゆくために必要なノウハウ、すなわち「民主政の技法」を、百年以上かけて積みかさねていた。その政治文化は、ちょうど水面に投げられた石から波紋が広がるように、アテナイから周辺に拡がり、各ポリスによって積極的に受容されていった。

たとえば「民主政の技法」の一つに、民会決議の書式がある。アテナイで発達した碑文文化は、民主政の進展とともに各国に拡がり、それにともなって公文書の書式にもアテナイの文化的影響が色濃く反映されるようになっていった。

（2）器具や道具のたぐいが、「民主政の技法」をなかだちしたことも重要である。アテナイの裁判員は、めいめい青銅製（のちに木製）の名札を携帯していた。これは身分証として用いらただけではなく、法廷を編成するため、抽選器とともに不可欠の小道具であった。これと同種の名札が、ロドス（エーゲ海東南）、シノペ（黒海南岸）、タソス（エーゲ海北部）といった、アテナイから遠く離れた地からも発見されることは、民主政の拡散現象を示す証拠として、非常に興味深い。それらはおおむねアテナイの名札の形式を模倣したもので、抽選器とともにアテナイから伝播したものであることはまちがいない。どちらもエーゲ海に浮かぶ大きな島で有力なポリスだったロドスとタソスが、前五～四世紀をとおして断続的に民主政を採用していたことは確実である。シノペも、ペリクレス時代からアテナイの友好国で、民主政だった可能性が高い（Kroll, J.H. 1972. *Athenian bronze allotment plates*, Cambridge, Mass., fig.149 (Athens), 309 (Sinope)）。

（3）名札を民会手当の配布に活用したポリスもある。豊かな漁業で栄えた小アジア沿岸の都市イアソスは、前四世紀初頭からアテナイ型の民主政を採用したポリスであった。前四世紀末のイアソスの民会決議碑文は、民会手当（エクレシアスティコン）の配布方法を、じつに入念に取りきめている。そこでは民会を招集する際に水時計・市民の名札（ペッソス）・名

札を入れる小箱が用意され、それらは民会手当の分配手続きと連動していることがとくに注目される(Rhodes, P.J.& R.Osborne (eds.), *Greek Historical Inscriptions 404-323 BC*, Oxford, Oxford UP 2003, No.99)。イアソスはアテナイに比べれば小都市であるが、にもかかわらず大人口を抱えるアテナイで発達した効率の良い群衆整理や民会手当分配の方法が採用されていることが明らかとなった。また、テバイ近郊のオンケストスでは青銅製の投票具が見つかっているが、これもアテナイのものに酷似する。ただし用途の詳細はよくわかっていない。

抽選器、水時計、名札、小箱、投票具など、民主政の運営に必要な小道具とその用法は、アテナイで開発され、そこから国外に伝わっていったと考えてよいだろう。人口の多いアテナイでは、民会出席者や裁判員など、ときに数千人という数の市民を、短時間で手際よく整理し誘導する必要があった。しかもそれを毎日のようにくり返すのだから、おのずと効率というものが求められる。その必要からこうした技術が、他国にさきがけて発達したのである。とくに、一人の人間を一枚のカードによって記号化するというすぐれた発想は、陶片追放のように文字文化を政治技術にはやくから取り入れたアテナイならではのイノベーションである。モノを媒介にしたこのような技術は、政治的な強制よりも、はるかにたやすく民主政を拡散させていったと想像される。

(4) 書記技術が民主政の運営において果たした役割も注目される。ペロポネソスのアルゴリス半島を領有したアルゴスでは、アテナイに次いで古くから民主政が採用されたが、ここで近年発見された青銅版に刻まれた公文書から、公金の管理と役人の責任追及に公文書が活用されていることが注目される。これはアテナイと類似の制度であり、アテナイ由来のものである可能性がある。ある時期まで貴族政であったが、前四世紀にはいつからスパルタの強権支配を受け、それへの反発から民主政に移行したテバイでも、ポイオティア連邦という特異な枠組み内ではあったが、公職者の責任追及制度が発達したことがうかがえる。テバイ近郊のオンケストスから、アテナイで使われていたのと酷似する投票具が発見されたのも重要である(前述)。このように前四世紀の第2四半期から本格化するギリシア各地での民主政の拡散においては、アテナイ由来と考えられるさまざまな民主政の技法が採用されていたことが明らかとなった。

(5) アテナイは、前五～四世紀を通じて、ギリシア世界の政治・経済・文化の重要な中心地であった。多くのポリスがアテナイから「民主政の技法」を受け入れてゆくさまは、ちょうど多くのギリシア語方言が、前四世紀からアッティカ方言を取り入れて共通語コイナーにまとまってゆく経緯と、まさに軌を一にしている。民会決議の書式に端的に現れるように、アテナイの政治技術はギリシア民主政の共通言語となってゆく。「民主政の技法」は、政治的圧力によって強制されるものではなく、むしろ各国の必要に応じて自由に選ばとられる政治文化であった。

多くの住民を統合する技術として民主政がすぐれていることは、三〇人政権の打倒後、寡頭派との和解にみごとに成功したアテナイが実証済みであった。はてしない党争に悩み、同じように市民団統合の課題を抱えていた他の多くのポリスで、その成功事例をすすんで模倣しようとする動きが起こったとしてもおかしくはない。「アテナイ中心史観」は誤りだが、にもかかわらず、アテナイがある時期から民主政拡散の中心の一つになったことは明らかである。

(6) 古代のアテナイは基本的には口頭伝達の主たる情報伝達手段であったが、2550 平方キロメートルの領土に成年男子市民だけで最盛期に 5 万から 6 万人を数えたアテナイは、例外的な大国であり、その領土の隅々に国家の決定など政治参加に必要な情報を素早く行き渡らせるためには、文字による情報伝達が不可欠であり、それゆえ前 5 世紀初頭からアテナイではさまざまな手段で文字媒体を活用し、民主政の運営に役立てた。さらに伝達のみならず、記録と保管という機能においては、改変を受けやすい個人の記憶能力よりも、文字の方が格段に優れていた。アテナイ民主政は、公文書の保管と公開にリソースを費やす過程において、文字の潜在能力を最大限に活用したと言える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 橋場弦	4. 巻 131 - 6
2. 論文標題 追悼文 伊藤貞夫先生を偲ぶ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 95-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋場弦	4. 巻 861
2. 論文標題 賄賂研究の射程	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 6-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋場弦	4. 巻 69
2. 論文標題 シンポジウム：オリンピア 古典古代のからだところ 趣旨説明	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 81-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋場弦	4. 巻 104-2
2. 論文標題 書評：栗原麻子『互酬性と古代民主制 アテナイ民衆法廷における「友愛」と「敵意」』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 57-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋場弦	4. 巻 697
2. 論文標題 「おはなし」と歴史学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 公研	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋場弦	4. 巻 69
2. 論文標題 伊藤貞夫先生のご逝去を悼む	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 221-224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋場弦	4. 巻 368
2. 論文標題 『直接民主政 = 衆愚政』は方便 古代ギリシアが射抜く本質	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊ジャーナリズム	6. 最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 橋場弦	4. 巻 687
2. 論文標題 疫病ふたたび	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 公研	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hashiba, Yuzuru	4. 巻 -
2. 論文標題 s.v. Stesikleides (245), Andron (246), Theodoros (346)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 I. Worthington (ed.), Brill's New Jacoby, second edition, Brill, Leiden (Online)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 橋場弦
2. 発表標題 伝アリストテレス『アテナイ人の国制』の伝承と受容：レンボスのヘラクレイデスの場合
3. 学会等名 ギリシャ哲学セミナー第25回共同研究セミナー (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橋場弦
2. 発表標題 オリンピア・古典古代のからだところ (趣旨説明)
3. 学会等名 日本西洋古典学会大会第71回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 橋場 弦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 268
3. 書名 古代ギリシアの民主政	

1. 著者名 村川堅太郎 (解説 橋場弦)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 オリンピア	

1. 著者名 木村靖二、岸本美緒、小松久男、橋場弦	4. 発行年 2023年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 392
3. 書名 詳説世界史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Professor Josine Blok (Utrecht University), Drawing lots for polis office: anchoring political innovation in Ancient Greece	開催年 2022年~2022年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------